

茨城県稲田地域の花崗岩石材産業の歴史と現状

History and present of the granite quarries of Inada area, Ibaraki

乾 陸子^{1*}, 中司祐樹²

Mutsuko Inui^{1*}, Yuuki Nakashi²

¹国土館大学理工学部, ²国土館大学工学部

¹Kokushikan University, ²Kokushikan University

日本には花崗岩の産地が多くあり、かつては建築石材として用いられていた。しかし、1980年代頃から安価な輸入品が増加し始めたことに加え、海外の加工技術も上昇したこと、国内の産地では資源が枯渇した（以前と同等の品質の材が取れない）地域があること、産地が小規模なため機械化が難しいこと、自然保護規制が厳しくなったことなど、様々な要因からほとんど建築石材としては用いられなくなって久しい。このため、国産花崗岩の建築石材に関する記録は産地でも散逸しつつある。また、国産建築石材が用いられた歴史的建造物においても、石材名に関する記録がなく、修復の際に同じ石材を求めるために再調査が必要となるような事例も出ている。石材は地域の基盤であったと同時に、その石材を利用したことで歴史的建造物にも価値を与えた存在であったはずである。国産花崗岩石材産業の経緯やその作品（建築物）に関する記録を今できる限りまとめておく必要があると考え、調査を進めている。国内の花崗岩産地の特徴として、現在も石材としての採掘が行われている産地が多い、ということがある。これは、今ではほとんど工業材料（いわゆる石灰石）としてしか採掘されなくなっているかつての大理石産地とは異なる点である。そこで本研究は、茨城県笠間市稲田を対象として、国産花崗岩産業の歴史と、現在の産業構造、そして産地の社会活動における石材の位置づけを、文献とヒアリング（採掘会社・地域の方々にご協力いただいた）により調査したものである。

茨城県笠間市稲田で産出する花崗岩は、石材としては「稲田石」と呼ばれ、その色合いから白みかげに分類される。東京から約100kmと立地に恵まれ、とくに鉄道による大量輸送が可能になってから生産量を伸ばし、最高裁判所をはじめ首都圏の歴史的建造物にも多く利用されたが、今では建築石材としての採掘はほとんどない。現在採掘されている稲田花崗岩石材の主な用途は墓石であり、利用可能な（キズのない）部分の半分以上を占めていた。石材に関するまとまった統計はないが、稲田石墓石の製造量は過去10数年であまり変化していないとのことであった。墓石以外では、寺社関連に用いられるものが需要を支えていることが分かった。現地調査を行ったところ、地域では今でも公共建築物や公園などに稲田石が多く用いられていたり、また製品にできない廃材を家庭などで利用するシステムがあった。また、資料館や展示スペースが設けられて稲田石に関する情報発信や新たな活用が模索されていた。結論として、稲田石は、寺社仏閣墓石に利用される高級石材としての需要があり採掘され続けていることが分かった。また、地域には石材産地ならではの社会経済活動があり、地域が誇る産物のひとつとして位置づけられていることが分かった。

キーワード:花崗岩,石材,建築,墓石,稲田

Keywords: granite, building stone, architecture, head stone, Inada